

湖沼会議

2018

茨城県つくば市のつくば国際会議場で今月18日午前に開かれた世界湖沼会議の分科会でひととき注目を集める発表があった。野洲市須原の水田で、稲作と魚の生育を同時に行う「魚のゆりかご水田」事業を紹介していた堀彰勇さん(69)らによる環境保全に取り組む市民団体「せせらぎの郷」の会場は、ほぼ満席の約100人の研究者や市民を集めた。用意した50人分の資料では不足、予備で持参した別の資料50部を配布する盛況ぶりだった。

今年で11年目となる取り組みで、ニゴロブナなど琵琶湖の在来魚が魚道を遡上し、魚道とつながった水田で稲と一緒に魚が生育できる環境を整える活動だ。今年には農家13戸の協力を得て、12秋で展開。田植えや稲刈りといった通常の農作業のほか、生き物観察会などのイベントも開き、約200人が集まる人気ぶり

水田、湾 市民主体で整え

いう。

分科会の会場でも、「魚道の堰板はどう打つのか」「水田の環境面で問題はなかったのか」など質問が相次ぎ、20分間の発表時間が終わっても、質問を求める聴講者の列が途切れることはなかった。堀さんは「生物と稲作を一体に行う試みが珍しく、これからの参考になりたい人が多かったのでは」と話す。

16日午前の分科会には守山市のNPO法人「びわこ豊穰の郷」理事長の金崎いよ子さん(65)が、約20年取り組んでいる同市沿岸の琵琶湖・赤野井湾の水質改善に向けた試みを紹介した。「かつて観

賞できたゲンジボタルの姿が再び確認できるようになった」などと説明した。金崎さんは「ホタルのように、子どもも大人も関心を持ち続けられる取り組みが欠かせない。誰もができる活動が少しでも広まれば」と期待を込める。

発表者として会議に登壇し、琵琶湖の水質を巡る最近の動向を語った琵琶湖政策担当の小松直樹・県理事は「湖岸近郊の住民は意識の根底で、琵琶湖につながる川などを守りたいという気持ちを持っている」と話す。川や水田などの水辺環境を守る市民主体の活動が、琵琶湖の水を支えている。



聴講者からの質問に答える堀さん(左、茨城県つくば市で)